

なぜ大学生は異文化間コミュニケーションを学習するのか

— 一般学部生と外国語学部生の比較調査結果から —

Why do University Students Study Intercultural Communication

— A Comparison between the Students in the General Department
and the Foreign Language Department —

中川 典子*

Noriko Nakagawa

本稿の目的は一般学部生と外国語学部生の異文化間コミュニケーション学習動機について、Deci & Ryan の自己決定理論の枠組に基づき検討することである。アンケート調査の結果、異文化間コミュニケーションを学習する動機について各大学で複数の構成概念が浮かび上がった。本稿では、調査の結果得られた概念カテゴリーを自己決定理論の中の内発的動機、外発的動機の観点から分析することにより、各学部における共通点と相違点を探索する。

キーワード：異文化間コミュニケーション、学習動機、自己決定理論

I. はじめに

異文化間コミュニケーションの起源は、1950年代の米国に遡る。この分野は第二次大戦後の問題処理と新しい対外占領政策を円滑に進める目的で開始されたが、1960年代になり、米国が国内外の様々な課題を原因とする内憂外患の時期に突入するや、異文化間コミュニケーション研究の重要性が広く認識されるようになった。やがて、実用的な側面からのアプローチだけではなく、1970年代には研究の体系化の必要性が指摘されるようになった。その後、異文化間コミュニケーションを専門とする学部学科が大学でも開設されるようになった。そして、ビジネスや教育の現場で異文化間トレーニングと呼ばれる教育訓練活動も盛んに実施されるようになり、今日までの長きに渡り研究教育活動が広く行われている。一方、日本におけるこの分野に対する関心は、1970年代に始まったとされ¹⁾、米国の大学院で教育を受けた研究者たちが帰国し始めた頃とあいまって本格的に導入され始めた。やがて「異文化(間)コミュニケーション論」、「国際コミュニケーション論」、「国際理解」などの講座が開設され、大学の学部の名称として「コミュニケーション」や「異文化(間)コミュニケーション」を掲げるようになったのは1980年代になってからの

*流通科学大学人間社会学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

ことである。

教育に携わる者にとっての重要な関心事の1つは、授業においていかに学生たちを実りある学びへと導くかという課題に加え、なぜ、彼らは特定の科目を履修することを希望するのかといった学生たちの学習動機を吟味し、その知見を将来の授業計画に反映することであろう。「学習動機」というキーワードでCiNii²⁾を検索したところ、2016年3月時点で、690件の論文がヒットした。その内容の3割以上(230件)は大学をはじめ、中学校や高校における外国語学習(外国語としての日本語学習を含む)に対する動機に関する論文であり、残りは外国語以外の学習動機に関するものであった。ちなみに、前者のうち、英語学習に関するものがもっとも多く(126件)、外国語学習としての日本語学習動機に関するものがこれに続き(75件)、残りはドイツ語、中国語、韓国・朝鮮語、ロシア語、その他(第二言語学習、二言語間の学習動機の比較、学習動機モデルに関するもの)であった。一方、大学生がなぜ、異文化間コミュニケーション関連の授業を履修し、学習するのかといった観点から学習動機を調査した論文は見あたらなかった。

そこで、本稿では筆者が2015年度に2つの大学で担当した「異文化間コミュニケーション論」の授業で実施したアンケート調査の結果を分析することにより、大学生の異文化間コミュニケーション学習動機の実態を報告する。調査対象となった大学生は、独立法人系総合大学の外国語学部に所属する学生と、私立総合大学の一般学部所属する学生であった。本稿では異なる学部所属する大学生の異文化間コミュニケーション学習動機における共通点と相違点もあわせて検討したい。

II. 本研究が基づく理論と学習動機の先行研究

学習動機は個人の学習活動を規定する重要な心理的要因であり、学習動機に関する研究は、教育心理学や社会心理学など、心理学の領域で発達を遂げてきた。動機づけ(motivation)とは、「生活体に行動を起こさせ、そしてその行動を一定の方向へ導いていく過程の総称」³⁾とされ、動機と動機づけはほぼ同義に用いられることが多い。次節では、本研究の理論的枠組みである動機づけモデルとして、Deci & Ryan⁴⁾の「自己決定理論(self-determination theory)」について述べる。

1. 自己決定理論(self-determination theory)と内発的動機・外発的動機

自己決定理論は、「自分が自分の行動の決定にどれだけ関与しているか、行動は自分が選択したものか、自分の内部から湧き出たものか」といった問いに関連し、いわゆる「内発的動機づけ(intrinsic motivation)・外発的動機づけ(extrinsic motivation)」という概念を核とする理論である⁵⁾。桜井⁶⁾は、この二種類の動機を区別するために最もよく使われてきた視点として次の2つをあげている。第1の定義は、内発的に動機づけられる行動は「行動そのものが目的化している」のに対し、外発的に動機づけられる行動は「行動そのものは手段である」というように、目的あるい

は手段で分類する方法である。そして、第2の定義は、その行動が誰によって開始されたものかという視点から区別するものである。すなわち、本人自身により開始される行動の背後には内発的動機づけがあり、本人以外の要因によって行動が開始される場合には外発的動機づけがあるという考え方である。

一方、鹿毛⁷⁾は、内発的動機づけと外発的動機づけの区分は研究者により多様な見方や定義があり、一様に説明することは困難であると指摘している。特に教育との関連では、内発的-外発的動機づけという枠組みから多くの研究が行われてきたが、その2つの動機づけは、従来、二項対立的に捉えられることが多かった。内発的に動機づけられた個体と環境とは常に対立的な関係を持っていると理解されがちだが、外的な事象の存在と内部の欲求は内発的動機づけ、外発的動機づけのいずれの過程にも存在している^{7) 8)}。内発的動機づけは外的環境に促進的にも抑制的にも規定されるのであり、外からの働きかけと対立するものではない。例えば、英語が好きだから楽しんで学習している子供に対して、母親が「今度のテストで100点を取ったら、お小遣いをあげてあげる」と提案した場合、もともとは内発的に動機づけられた行動が、報酬の提示という外発的な要因により、やる気がなくなってしまった、という減退効果（アンダーマイニング＜undermining＞効果）、すなわち、負の効果が生じる場合が考えられる。鹿毛は、内か外かという単純な二項対立的な図式でこの問題を論じると本質を見失う可能性があるため、内発的動機づけの過程は、内と外との相互作用のあり方に関する1つの質を記述する概念であるにとらえるべきであるとしている。また、中高生の学習動機の研究に詳しい速水⁹⁾も、人は成長する過程で外界の様々な刺激を取り込むことにより、行動を形成し、その結果、自己を形成していくため、最初は大人数からの命令や指図で行動が開始したとしても、同じ行動を繰り返すうちに、自己決定がなされ、自己調整ができるようになる場合が多いと指摘している。以上のように、ひと口に、内発か、外発かといっても、現実的にはその境界は断定的ではない。自己決定理論は、内発的か外発的かの二項対立的発想ではなく、外発的に動機づけられている行動であっても、それを個人がどの程度内面化（internalized）しているかによって、管理的（controlled = extrinsic）から、自己決定的（self-determined = intrinsic）への連続体で考えている。

内発的動機・外発的動機の二分法に関して、これらを細分化する理論がある。例えば、Vellerand¹⁰⁾は、内発的動機には知識（知識を得ることが楽しく満足感をもたらす）、達成感（自分の能力を伸ばすこと、何かをやり遂げることから得られる喜びを求める）、刺激（そのタスクを行うこと自体から得られる自己興奮・刺激・喜び）の三つがあるとしている。また、自己決定理論^{4) 10)}では従来対立するものとして考えられることの多かった内発的動機づけと外発的動機づけを統合的に捉え、自己決定性（自律性）という観点から動機づけを細分化し、連続性をもつものとしている。外発的動機づけを「自己決定」の程度により分類できることを指摘したのはDeci & Ryan⁴⁾である。ここでいう自己決定とは、自分の欲求の充足を自身で自由に選択することを意味している。Deci &

Ryan は、自己決定度の低いものから高いものまでを図 1 のように分類した。すなわち、内発的にも外発的に動機づけられていない状態を無動機 (amotivation)、すなわち、目的意識がなく、報酬の期待もないので行動が全く自己決定されない状態と、その他の外発的動機を自己決定度の低いものから高いものへ「外的調整、取り入れ調整、同一化的調整、統合的調整」の 4 段階に分類した。

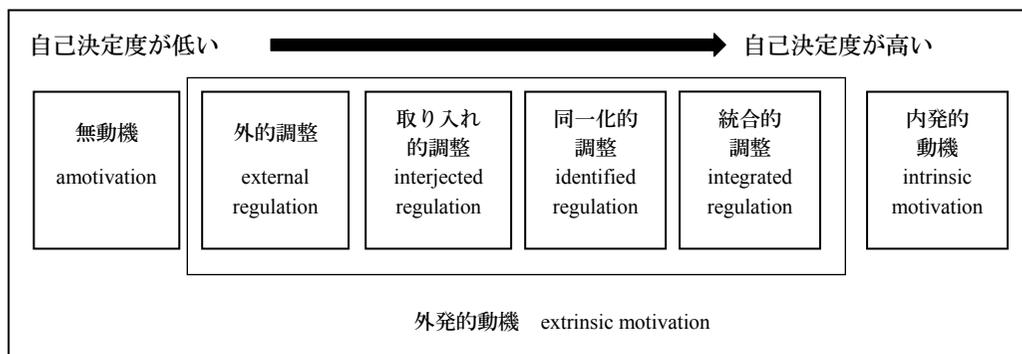


図 1. 自己決定理論による動機づけのプロセスモデル

以下、外発的動機の各段階に対する岡田¹¹⁾の説明に例を付記して説明する。

- 1) 外的調整 (external regulation) : 外的な報酬を得るため、あるいは他者からの統制的な働きかけによって学習に取り組む動機づけ。(例: 親や先生に強制されるから勉強する。)
- 2) 取り入れ調整 (interjected regulation) : 自尊心を維持し、不安や恥ずかしさを低減するために自我関与的に学習する動機づけ。(例: 不安だから勉強する、恥をかきたくないから勉強する。)
- 3) 同一化的調整 (identified regulation) : 学習内容に個人的な価値や重要性を見出し、積極的に取り組む動機づけ。(例: 自分にとって重要なことだから勉強する。)
- 4) 統合的調整 (integrated regulation) : 学習することに対する同一化的調整が他の活動に対する価値や欲求と矛盾なく統合され、自己内で葛藤を生じず学習に取り組む動機づけ。(例: 多様な視点をもった人になりたいため、勉強する。)

速水⁹⁾は、「取り入れ調整」はその程度は弱く、消極的ではあるものの、外界からの直接の圧力や外的調整がともなわず、内からの圧力で行動(学習)を自己調整できる点で、「外的調整」との違いを見出している。また、「同一化的調整」は、「取り入れ調整」よりもいっそう自己決定が積極的な方向に進んでいるとみなすことができると指摘している。自己決定理論の中の外発的動機の下位理論である 4 段階は、もともと自分が抱いていなかった社会的価値に代表される外的な価値が自分の価値として内在化していく過程を示すもので、有機的統合理論とも言われて

いる。但し、実証的研究では、統合的調整が扱われることは少なく、外的調整、取り入れの調整、同一化的調整、内発的動機づけの4つの側面から動機づけの効果を検討することが多い¹¹⁾。

2. 自己決定理論に関する先行研究

ここでは、自己決定理論を基礎とする学習動機に関連した先行研究についてその一部を紹介する。まず、安藤ら¹²⁾は、自己決定理論の枠組みを用いて、小学校3年生から6年生までの1064名を2群に分け、国語または算数いずれかの積極的授業参加行動と動機づけに関する調査を実施した。構造方程式モデリングによる検討を行ったところ、内発的動機づけは全ての積極的授業参加行動を促進しているが、低自律的外発的動機づけは積極的授業参加行動を抑制することを明らかにした。岡田¹¹⁾は、自己決定理論にもとづく動機づけ概念間の関連性について学校段階による差を検討するために、メタ分析的な手法を用いて研究知見を統合している。小学生、中学生、高校生、大学生の4グループ間での比較を行った結果、小学生と大学生においては、統制的な動機づけ（外的調整、取り入れの調整）と自律的な動機づけ（同一化的調整、内発的動機づけ）が比較的独立している一方で、中学生と高校生においては、すべての動機づけ概念間に正の関連がみられた。このように学校段階によって異なった結果が得られ、動機づけ概念間の関連性の違いを考慮した働きかけの重要性について指摘した。メタ認知方略との関連に着目した研究として、西村ら¹³⁾は、中学生における内発的な学習動機づけと同一化的な学習動機づけの学業成績に対する影響の相違を検討した結果、学業成績に対する同一化的な学習動機づけの重要性を示唆した。鈴木と櫻井¹⁴⁾は、Kasser & Ryanの将来目標の内発—外発の2分に従い、利用価値を展望する将来目標により2分し、（1）現在の学習が将来の自己成長や社会貢献といった内発的将来目標のために役立つと考える「内発的利用価値」と、（2）現在の学習が将来の金銭的成功や名声の獲得といった外発的将来目標のために役立つと考える「外発的利用価値」とを下位尺度とする「内発的—外発的利用価値尺度」を開発し、高校1年生を対象に学習動機づけへの影響を検討した。その結果、内発的利用価値は、主にマスタリー目標志向性を媒介に内発的動機づけなど適応的な学習動機づけを促進するのに対して、外発的利用価値は、主に遂行回避目標志向性を媒介に勉強不安など不適応的な学習動機づけに影響を及ぼす可能性のあることを明らかにした。また、自己決定理論を援用した他の研究例として、原田¹⁵⁾は留学生を対象に留学経験が学習動機とどのように関わるかを質問紙とインタビューにより調べた結果、外発的動機づけから内発的動機づけへの変化が検証されたことを報告している。

外国語学習の動機づけ研究の先駆者は、Gardner & Lambert¹⁶⁾である。彼らは外国語学習の動機づけを道具的指向性（instrumental orientation）と統合的指向性（integrative orientation）に分類して理論化を図った。道具的指向性とは、外国語学習を主としてよりよい仕事やより高い給料を得るなどの期待される実利に関連して行う指向性であり、他方、統合的指向性とは第二言語集団に対

する肯定的な気持ち、その社会と交流し、さらにはその社会の大切な成員と類似した存在になることを希望する指向性である¹⁷⁾。これに関連して、統合的動機づけと道具的動機づけが外発的動機づけと内発的動機づけのどちらに分類されるかについては、様々な見方がある。例えば、Clement & Kruidenier¹⁸⁾は、自己決定理論での「外発的動機づけ」は道具的動機づけに対応し、「内発的動機づけ」は統合的動機づけに対応しているとしている。一方、縫部¹⁹⁾らは、道具的動機づけ、統合的動機づけともに外発的動機づけに分類されると指摘している。

Ⅲ. 本調査について

本稿の目的は、二点に集約される。まず、筆者が2015年度に二つの大学で担当した「異文化間コミュニケーション論」の授業で実施したアンケート調査の結果を分析することにより、受講生の異文化間コミュニケーション学習動機の構成概念を調べることで、そして、調査で得られた学習動機の内容を自己決定理論の観点から分析し、二つの異なる学部生の結果を比較検討することである。

1. 調査対象者

調査の対象となったのは、3学部7学科を擁する関西圏の私立総合大学の一般学部（以下、A大学一般学部）に所属する学生33名（男性26名、女性7名；2回生20名、3回生4名、4回生9名）と、関西圏の独立行政法人系総合大学の外国語学部（25言語を擁する25学科）に所属する学生46名（男性10名、女性36名；2回生42名、3回生2名、4回生2名）（以下、B大学外国語学部）である。前者については、2015年度前期に「異文化コミュニケーション」²⁰⁾という名称で、後者については、同年度の後期に「文化史」というコースの中で「異文化間コミュニケーション論」という副題のもと、授業を実施した。尚、どちらの授業も共通選択科目として開講された。

2. 調査手続き

調査対象となった各々の大学の第1回目の授業で、授業前アンケートを実施した。質問した内容は、以下の3つである。（1）この授業を受講したいと思った理由は何ですか。なぜ、この授業を受講したいと思いましたか。（2）この授業に何を期待しますか。何を求めますか。（3）あなたのこれまでの異文化体験について書いてください。何をもちて異文化とするかはあなたの判断に任せます。（例：高校の英語の授業で先生が外国人だった、修学旅行で海外に行った、子供の頃、別の地域に引っ越した、など。）本稿では、上記（1）の学習動機の結果を分析し、学習動機と他の質問項目（授業への期待および異文化体験）との関係については、別の機会に報告する。

3. 分析方法

まず、回収した調査対象者の個々のアンケート用紙に連番を付し、すべての文章を個人別にエクセルに打ち込み、テキストファイルに落とし込む作業を行った。3つの各設問に対する回答ファイルはA大学とB大学と個別に作成し、全部で6つのファイルを準備した。先述のように今回については、「異文化間コミュニケーション学習動機」に関する2つのデータファイルのみを使用した。次に、筆者がすべてのデータに繰り返し目を通しながら、調査対象者が書いた回答文から意味を読み取る作業を行った。そして、そこで浮かび上がった共通概念をコード化し、次に上位概念と各上位概念に属すると思われる下位概念を表すカテゴリを作成して名称をつけるという作業を行った。さらに、Atlas ti (ver. 5.5) という質的データ分析のためのソフトウェアを用いて、以下のような分析作業を行った。

- ① Atlas 内の code manager の機能を使って、あらかじめ筆者が作成しておいた概念カテゴリとサブカテゴリを入力した。
- ② 異文化間コミュニケーションを専門とする別の研究者とともにカテゴリ名を再検討し、数が少ないサブカテゴリについては他のカテゴリと統合する作業を行った。その際、カテゴリの名称を再検討し、より適切なものに必要に応じて変更した。
- ③ 上記の作業の後で、先述の研究者とともに各回答文を概念的に一致するカテゴリにあてはめていく作業を行った。同一人物が異なる内容の文を複数書いていた場合は、文ごとにこの作業を行った。また、1文中に複数の概念が表されていると判断した場合は、個々の該当するカテゴリに分類した。カテゴリの名称として、学習動機を表す概念に加えて、「内発的動機」、「外発的動機」、「無動機」のカテゴリを設け、すべての回答文を内発的動機・外発的動機・無動機のいずれかに分類した。

4. 結果

ここでは、まず、調査対象者の自由記述から得た回答内容が該当した概念カテゴリの詳細について報告し、続いて、自己決定理論に基づく分析結果を報告する。

a. 異文化間コミュニケーション学習動機の特徴

分析の結果、異文化間コミュニケーション学習動機に関して、A大学一般学部については7つの下位概念からなる5つのカテゴリが、B大学外国語学部については8つの下位概念からなる6つのカテゴリが得られた。図2と図3は各学部の上位概念カテゴリと回答数を示したものである。

まず、A大学の一般学部について、全体で41の回答を得た。もっとも多かった回答は「理解と興味」(20件)であり、全体の48.8%に該当した。ここでは3つの下位概念が出現したが、回答

数の多かった順に、「自文化理解・異文化理解」(12件,60.0%)²¹⁾、「トピックへの興味」(6件,30.0%)、「外国人との交流」(2件,10.0%)があげられる。次に回答が多かったのは「コミュニケーションスキル」(10件,23.8%)であり、「異文化コミュニケーションスキル」(8件,80.0%)と「弱点の克服」(2件,20.0%)という下位概念から構成されていた。「将来」と「事前情報」については、各々全体の9.8パーセント(4件)を占めた。「事前の情報」は、「過去の経験」(2件,50.0%)と「シラバス」(2件,50.0%)という下位概念で構成されていた。最後に、上記以外の「その他の動機」(3件,7.3%)があった。

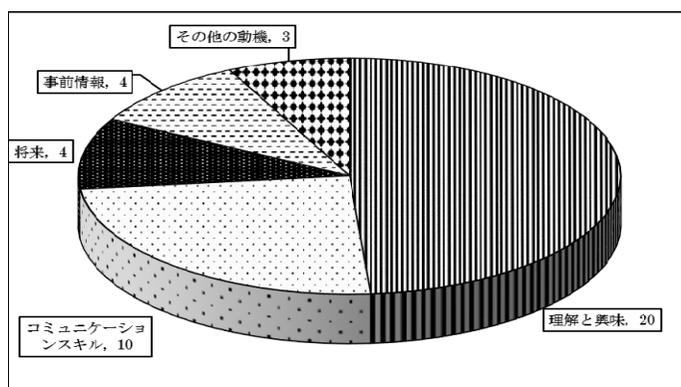


図 2. 異文化コミュニケーション学習動機 (A 大学一般学部)

* () 内の数字は回答数を示す。

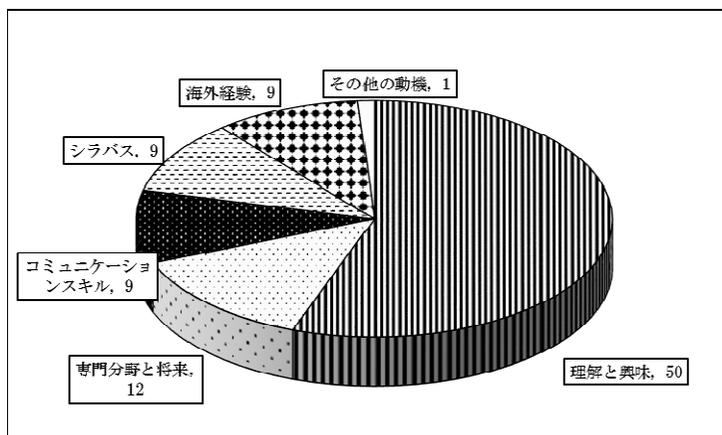


図 3. 異文化コミュニケーション学習動機 (B 大学外国語学部)

* () 内の数字は回答数を示す。

B 大学外国語学部については、全体で 90 の回答が得られた。もっとも多かった学習動機は、一般学部と同様、異文化間コミュニケーションに対する「理解と興味」(50 件)で、全体の 55.6 パーセントを占めた。ここでは下位概念として「トピックへの興味」(43 件,86.0%)、「自文化理解・異文化理解」(6 件,12.0%) および「外国人との交流」(1 件,2.0%) が出現した。一般学部では、「自文化理解・異文化理解」に関する回答がこのカテゴリーの 6 割を占めたのに対し、外国語学部では、「トピックへの興味」が 9 割近くを占める結果となった。次に多かった学習動機は「専門分野と将来」(12 件,13.3%) に関するものであり、「外国語学部の学生だから」(8 件,66.7%) と「将来」(4 件,33.3%) から構成されていた。そして、これに続いて多かった回答は「コミュニケーションスキル」(9 件)で、全体の 10 パーセントを占めていた。ここでは、「異文化コミュニケーションスキル」(5 件,55.6%)、「ディスカッションスキル」(3 件,33.3%) および「弱点の克服」(1 件,11.1%) に関するカテゴリーが浮かび上がった。ディスカッションスキルを身につけたいことを示した回答は、外国語学部でのみ見られた結果であった。一般学部でも「ディスカッション」に言及した回答が見られたが、それはコミュニケーションに対する苦手意識の克服を示唆する内容であった。その他、「シラバス」(9 件,10.0%) と「海外経験」(9 件,10.0%) に関する回答が同数見られた。最後に、上記以外の「その他の動機」(1 件,1.1%) があった。

b. 自己決定理論に基づく分析結果

ここでは、2 つの大学の調査対象者から得られたすべての回答内容を自己決定理論の観点から検討した結果について、対象者の回答例とともに報告する。

b-1. A 大学一般学部生の結果

図 4 と表 1 は、A 大学一般学部生の各概念カテゴリーにおける分類結果を示している。分析の結果、内発的動機 (24) が外発的動機 (16) を上回る結果となり、無動機は 1 件のみであった。まず、「理解と興味」(20 件) の中の下位概念の「自文化理解・異文化理解」に関して、内発的動機が全体の 83.3 パーセント (10 件)、外発的動機が 16.7 パーセント (2 件) と内発的動機が大幅に上回った。内発的動機の回答例として、「自分は今まで他の国の事について詳しく学んだ事がなかったので、この講義をきっかけに様々な国の文化を知りたいと思ったので受講しました」、「日本ではなく、他の国の文化はどういうのか全く知らないので受講しようと思いました」、等があった。外発的動機の回答は、「世界の様々な異文化を勉強してこれからの進路を考えていきたい」と「私は 4 年生になり、これから就職活動で忙しくなっていく中で、自己分析力を高め、自分と向き合っていきたいと考えたから」であった。ここでは、「その活動に価値をおき、その有用性を認識して個人的に意味のある目的のために行う」⁵⁾ の視点が表れていることから、これらは外発的動機の中の「同一化的調整」に該当すると考えられる。「トピックへの興味」および「外国人との

交流」についてはすべて内発的動機に分類された。「トピックへの興味」については、「異文化コミュニケーションという言葉が知らなかったの、気になり受講しました」、「異文化コミュニケーションってどんなことを学ぶのか気になったから」、等の回答が、「外国人との交流」については「異文化の人とコミュニケーションをとり、そこで自分にはどんな考え方やどんなことを思うのだろうと興味を持ち、受講したいと思いました」等の回答があった。

次に、「コミュニケーションスタイル」(10件)の中の「異文化コミュニケーションスキル」(8件)では内発的動機(2)が25パーセント、外発的動機(6)が75パーセントと上記とは逆の結果になった。内発的動機の回答として、「この授業で僕は自分に異文化の人の考え方を取り入れられたらなと思ひ、受講しました」と「知らない人とどうしたらコミュニケーションがとれるか、また、海外の人たちとどうやって話すか気になって受講した」があった。前者の回答例は「理解と興味」カテゴリーの「自文化理解・異文化理解」にも分類された回答であったが、「自文化理解・異文化理解」は「異文化コミュニケーションスキル」の必要条件あることから納得できる結果であると思われる。一方、外発的動機について、「今後は他の文化の人と関わることもあると思うので、異文化コミュニケーションは学んでいたほうが良いと思ったからです」、等の回答が見られ、すべての回答は「同一化的調整」に該当した。もう一つの下位概念である「弱点の克服」(2件)について、「自分はとても人見知りなので、少しでもいろいろな人とコミュニケーションがとれたらいいなと思っています」や「コミュニケーションが苦手で、うまく取りたいと思っていたから」との回答を得たが、これらは自尊心の維持に関連した内容であることから外発的動機づけの「取り入れ的調整」に分類された。

「将来」(4件)についても、外発的動機(3件)が内発的動機(1件)を上回った。ここでも外発的動機のすべては「同一化的調整」に該当し、「世界の様々な異文化を勉強して、これからの進路を考えていきたい」、「これから先、グローバル化していく世の中で、将来会社勤めする際にも同僚が外国人だった場面において耐性をつけておくため、今からその準備を始めようと考えたため」、等の回答が見られた。また、外発的動機と内発的動機の両方に該当する回答として、「私は今、4回生になり、これから就職活動をするうえで、自己分析力を高め、自分と向き合っていきたいと考えたから」があった。

「事前情報」(4件)の中の「過去の経験」は内発的動機と外発的動機が1件ずつ該当した。内発的動機として、「高校生の時から外国に興味があり、英語の先生が移住してきた外国育ちの子と話をしていてもっと海外について知りたいと思ったから」という回答が、外発的動機として『対人コミュニケーション』という中川先生の授業を受けたことがあり、コミュニケーション能力もつき、単位ももらえて一石二鳥だと思ったからです」との回答があった。この外発的動機は単位取得という報酬を目的としているため「外的調整」を示している。「シラバス」に該当した回答は、「教養科目のところは単位が足りなくて、何かおもしろそうな科目は何だろうと探したら、異文

化コミュニケーションがあり、海外のこととか好きなのでこれを履修しました」といった内発的動機とともに、外発的動機の中の「外的調整」に該当する内容であった。

最後に、「その他の動機」(3件)として、「去年の後期に親友がこの講義を受講していて、話を聞いて受講してみたいと考えたから」の回答例に見られるような内発的動機(1件)、「この授業が教養科目だったから」といった外発的動機の「外的調整」、そして、「友達が受講していたので、一緒に受けようと思ったから」といった無動機に該当する回答が見られた。

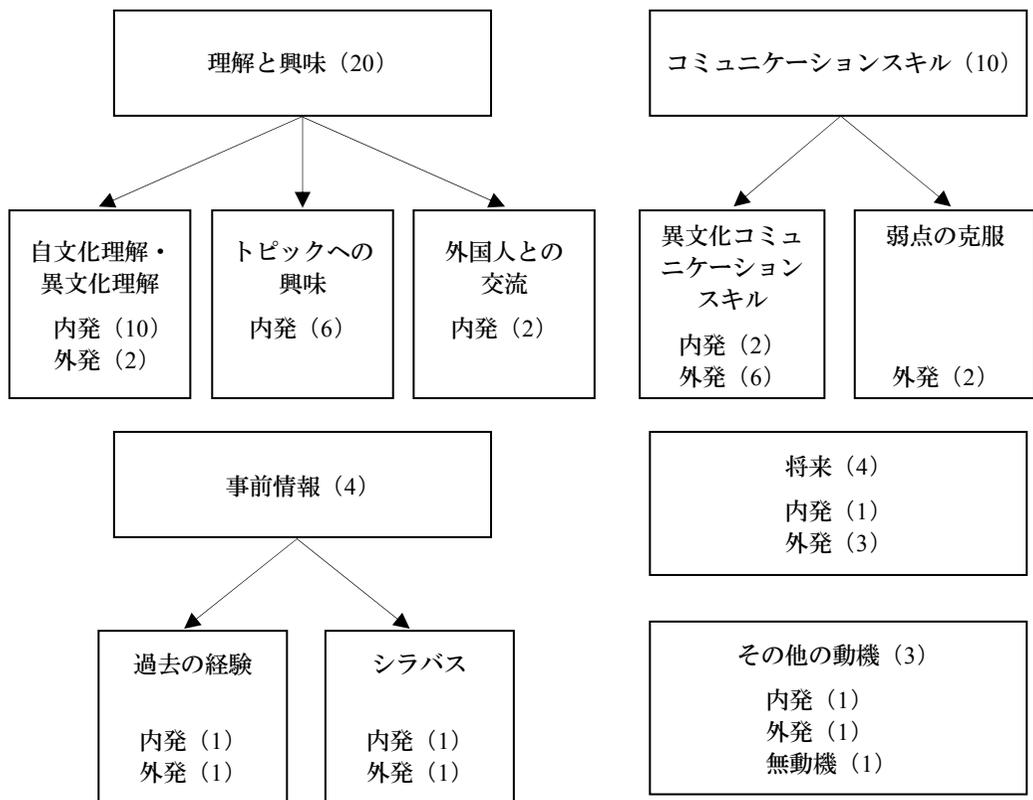


図 4. 学習動機と内発的動機・外発的動機・無動機との関係 (A 大学一般学部の結果)

* () 内の数字は回答数を示す。内発は内発的動機を外発は外発的動機を示す。

尚、内発・外発の両方に分類された回答については、内発・外発の各項目にその数を記載した。

表 1. 各概念カテゴリーと内発的動機・外発的動機・無動機の結果 (A 大学一般学部)

概念カテゴリー	理解と興味	コミュニケーションスキル	将来	事前情報	その他の動機	合計
内発的動機	18	2	1	2	1	24
外発的動機	2	8	3	2	1	16
無動機	0	0	0	0	1	1

b-2. B 大学外国語学部の結果

図5と表2は、B 大学外国語学部の各概念カテゴリーにおける内発的動機と外発的動機の分類結果を示している。90 件の回答中、内発的動機と外発的動機を表わす回答数が拮抗する結果となった。この結果は対象者が異文化間コミュニケーションを学習する理由を目的と手段の両方の観点から捉えていたことを示唆している。尚、無動機については1件あった。

まず、「理解と興味」に関して、内発的動機が29件、外発的動機が21件見つかった。もっとも多かった下位概念の「トピックへの興味」(43件)について、内発的動機は全体の5割以上をしめた。ここでは回答例として、「第7回以降から予定されている『マスメディアとステレオタイプ』、『偏見と文化摩擦』、『文化的価値観』、『カルチャーショックと異文化適応』、『異文化適応と文化的アイデンティティ』に興味を持ちました」、「コミュニケーションにおいて必要なことは『言語』だと思っていたが、『異文化コミュニケーション』と『文化』と書いてあって興味をもった」、「コミュニケーションを学問として考えるということに興味を持ったため」、「言語以外の側面からコミュニケーションを考えてみたかったので」、「シラバスを読んでステレオタイプやメディアに関することも学べると書かれていたからです」、等の様々な回答が見られた。他方、外発的動機に該当したすべての回答は「同一化的調整」に相当する内容であった。例えば、「私は日中関係にとっても興味があります。いままでは政治的な外交などの関係を学んでいましたが(国際コミュニケーション)、人と人、民族同士のコミュニケーションも日中関係を知るうえで大切だと思い、この授業を受けることにしました」、「単純に言葉の壁を乗り越えさえすれば異文化コミュニケーションが成功したことになるわけではないと思うので、学問的なしつかりとした理論を知りたい」、「グローバル化が進む中で外国語を勉強することも重要ですが、異文化コミュニケーションについて勉強することも重要だと思ったので、この授業を受講したいと思いました」、「コミュニケーションは日々の生活、これからの人生で大切だと思う」、等の回答が見られた。

「理解と興味」の2番目の下位概念である「自文化理解・異文化理解」(6件)については、内発的動機に該当する回答が4件、外発的動機に該当する回答が2件見られた。内発的動機では、「異なる文化を持つ人々への理解を深めるため。異文化への理解を通して日本への理解をさらに深めるため」、「異文化コミュニケーションについての詳しい理解があったわけではないが、異なる文化について学ぶのが好きだから受講しました」、等の回答があった。一方、外発的動機では、「自分と異なる対象を理解していく助けになると思ったから」に見られるよう「同一化的調整」と、「大学で様々な授業を受け、文化が違うことによって争いが起きたりしていることを知り、自分は他文化でも変だと切り捨てずに受け入れられる人になりたいと思ったので。そのためにはコミュニケーションがとても大切であり、言語以外の側面からコミュニケーションを考えてみたかったので」に見られるように、自分の価値観、必要性やアイデンティティなどと調和のとれた選択的行動を示す「統合的調整」を示す回答があった。最後に、「外国人との交流」(1件)につ

いては、「まず、ひとことで言いますと、日本という同質均質な社会で生きてきた者として、外国人との交流を熱望しているからです」という内発的動機にあたる回答が1件あった。

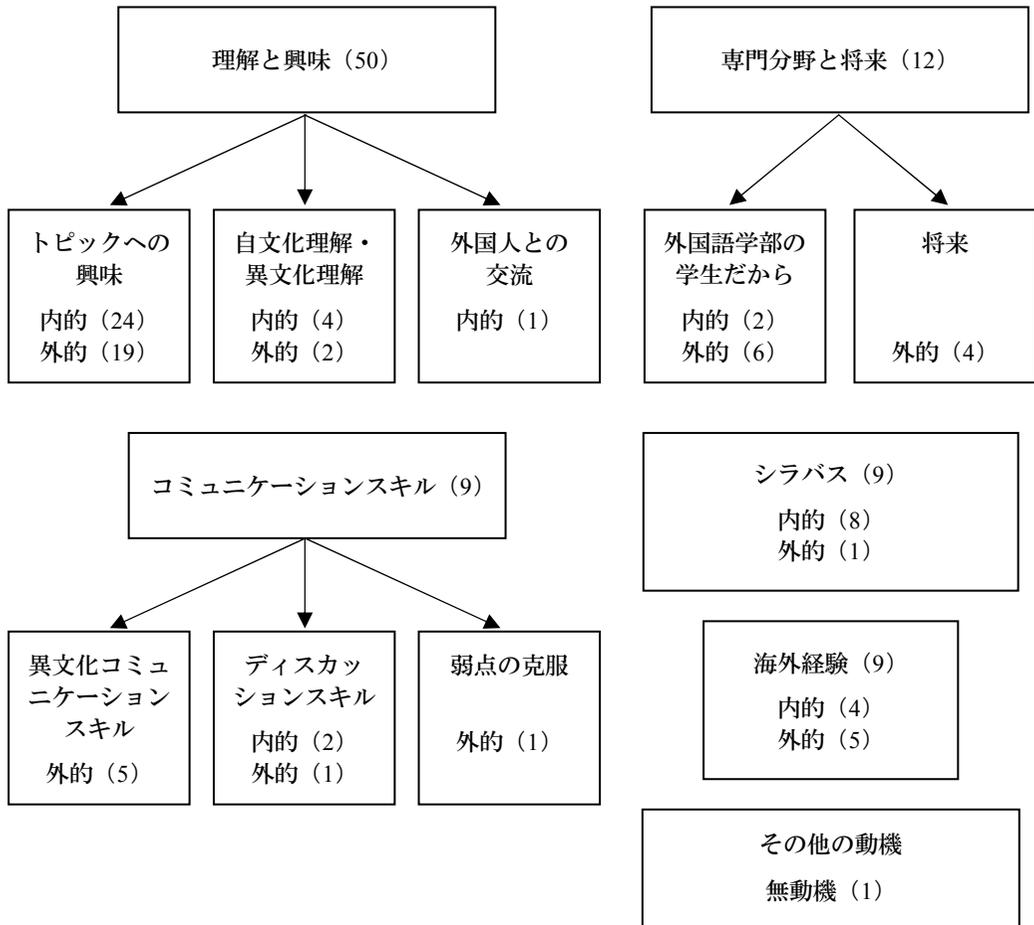


図 5. 学習動機と内発的動機・外発的動機・無動機との関係 (B 大学外国語学部の結果)

* () 内の数字は回答数を示す。内発は内発的動機を外発は外発的動機を示す。

尚、内発・外発の両方に分類された回答については、内発・外発の各項目にその数を記載した。

表 2. 各概念カテゴリーと内発的動機・外発的動機・無動機の結果 (B 大学外国語学部)

概念カテゴリー	理解と興味	専門分野と将来	コミュニケーションスキル	シラバス	海外経験	その他の動機	合計
内発的動機	29	2	2	8	4	0	45
外発的動機	21	10	7	1	5	0	44
無動機	0	0	0	0	0	1	1

2 番目に回答数の多かった「専門分野と将来」(12 件)の中の「外国語学部の学生だから」(8 件)については、内発的動機に関するもの(1 件)、内発的動機と外発的動機の両方に関するもの(2 件)と、外発的動機に関する回答が(5 件)見られた。回答例の「外国語を学んでいく中で、単に専攻する言語の運用能力を身につけるだけでなく、自分が学んでいる言語が用いられる国の文化に触れたり、また、世界全体という大きな枠組のなかでのそれぞれの文化について知りたいと思ったからです。また、それらを通して自文化を見つめ直す機会を持てれば良いなと思ったからです」は、内発的動機を示すものである。内発的動機と外発的動機の両方を示すものとして「外国語学部に所属している者として、異文化コミュニケーションというのはすごく意識し、興味のあることであり、また、知っておかなければならないことだと思ったので受講しました」、「外国語学部にいったからには異文化とのコミュニケーションは絶対必要だと感じたため、シラバスなども読んでこの授業に興味を持ちました」との回答があった。また、外発的動機にあたる回答のほぼすべてが「同一化的調整」を示したものだ。この「同一化的調整」を示した回答例として、「外国語学部に入学してから1年半経った今、自分が異文化コミュニケーションについて考えられているかと言われるとそうではないと感じました。この授業をきっかけに言語だけではなく、異文化コミュニケーションについても外国語学部生として学んでいきたいです」のように外国語学部生としての異文化間コミュニケーションに対する強い学習決意を表した内容のものが目立った。また、「外国語学部に在籍しているにも関わらず、外国人と接することがほとんどないことに気づき、『異文化コミュニケーション』の重要性を確認しようと思った」といった自尊心の維持に関わる回答が見られ、「取り入れ的調整」に該当した。一方、「将来」という下位概念については4件の回答があり、すべて外発的動機の「同一化的調整」に関するものだった。一例として、「日本語専攻で、日本語教師になろうと思っているので、異文化コミュニケーションに興味があったからです」、「私は来年留学を考えており、将来も国際的な仕事をしたいと思っているため、異文化の人とのコミュニケーションについて学びたいと思ったから」、等の回答があった。

3 つ目の概念カテゴリーの「コミュニケーションスキル」(9 件)については、「異文化コミュニケーションスキル」(5 件)、「ディスカッションスキル」(3 件)、「弱点の克服」(1 件)といった下位概念が浮かび上がった。まず、「異文化コミュニケーションスキル」について、ここでの回答はすべて外発的動機であり、「同一化的調整」に該当した。回答例として、「異文化コミュニケーションは、世間の中でもだんだんと注目されていることだと思うので、知識やスキルをしっかりと身につけたいです」、「異文化への理解を深めたいので、今後、海外に行った際や、日本で外国人と接する機会がある際には、できるだけ円滑なコミュニケーションを進めたいと考えるからです」、「夏休み中に一週間程、海外旅行に行っており、向こうの人とあまり話せなかったことを少し後

悔していたこともあったから」等の回答があった。別の下位概念の「ディスカッションスキル」については、内発的動機にあたる回答が1件、内発的動機と外発的動機（同一化的調整）の両方に相当するものが1件見られた。前者の例として、『外国語学部』と言えども、他の一般教養の授業は、... テストに向けて暗記するという受け身的なものであったにも関わらず、この講義は、...常に自分の考えを持って他人とディスカッションするという積極的なものだったので、興味を持ってました」との回答が、後者については「ディスカッションをできることに興味をひかれ、『その能力をあげたいな』と感じたため」との回答があった。3つ目の下位概念である「弱点の克服」に該当した回答は、「ディスカッションがあるとシラバスに書いてあり、私はディスカッションがすごく苦手なので、練習しようと思ったのも目的の1つです」で、「取り入的調整」に分類された。

「シラバス」(9件)については、内発的動機が8件、外発的動機が1件該当した。内発的動機として、「シラバスを見て、異文化コミュニケーションとはどういうものか、その重要性について学んでみたいと思ったから」、「シラバスを見て異文化コミュニケーションとは何なのか気になったから」、等の回答があった。また、外発的動機については「シラバスを読んで、ステレオタイプに関することも学べると書かれていたからです。現在、大学の部活動の関係でステレオタイプについての英語のスピーチを書いているのですが、なかなかインターネット等からでは十分な情報は得ることができずに困っていました。そのため、この授業を通して、ステレオタイプや文化、マイノリティへの考え方などを学べたらと思いました」のように、授業の学びを即、実践に活かしたいといった「同一化的調整」を示唆したものであった。

「海外経験」(9件)については、内発的動機に該当するものが3件、外発的動機に該当するものが4件、これらの両方に該当するものが2件見つかり、過去および未来の海外経験に関する内容から構成されていた。内発的動機の例として、「少し前まで海外で留学していて、自分とは異なる生活習慣や宗教観などをもった人たちに囲まれて生活をしていました。そのため、ぼんやりと異文化コミュニケーションというものについて興味を持ち始めたので、学問として講義を受けてみたいと思い受講を考えました」、等の回答があった。外発的動機のすべては、「同一化的調整」を示すものであった。例えば、「実は、将来的に留学することを考えており、留学先では『異文化コミュニケーション』を勉強したいと思っています。それゆえ、この授業はその良い基礎になるはずであるという意味で、今の自分のニーズにぴったりと合っているので受講したいと思います」、「この夏国際ボランティアに参加した際に、文化の違う欧米の方々とコミュニケーションをとることは文化の近いアジア圏の方々とコミュニケーションをとるよりも難しく感じ、うまくコミュニケーションをとれるようになりたいと思ったから」、等の回答があった。最後に、内発、外発の両方に該当するものとして、「前学期、前々学期に留学をしていた時に、言語だけでなく、その国の歴史や価値観も知っている必要性を実感し、その必要性についてもっと理解を深めたいと思

たからです」、「フィリピンへ短期留学に行った際、自分の価値観や文化と異なるものを理解することの必要性を感じて、異文化理解や文化人類学に興味があったのです。コミュニケーションという視点から異文化をみていくのは私にとって新しかったので、おもしろそうと思って受講を決めました」との回答が見られた。

最後に、「その他の動機」として無動機を示す「友達に誘われたから」との回答があった。

IV. 考察

まず、二つの学部生の共通点として、彼らの回答から浮かび上がった異文化間コミュニケーション学習動機に多くの共通概念が見られたことである。一般学部生についてはもとより、日頃から異文化に触れる機会の多い外国語学部生にとっても、アカデミックな観点から文化とコミュニケーションというテーマに取り組むことは、彼らにとって新鮮な興味の対象であったことがその回答から読み取ることができた。また、両学部生の回答で、報酬（例えば、単位取得）を目的とすることを示す外発的動機の「外的調整」に該当するものはごくわずかであった。この科目が、共通選択科目として提供されていたことから、両学部生ともに義務感からではなく何らかの関心をもって授業に臨もうとしていたと見受けられる。また、外発的動機の4段階の中で、どちらの学部生も「同一化的調整」に該当する回答が多く見られたが、速水²²⁾は、「完全なる外発的動機づけ、完全なる内発的動機づけよりも中間の動機づけの方が学習行動を支える中核的な動機づけとなっている」と指摘していることから、今回の結果は動機づけの保持という観点から鑑みれば肯定的な結果が示されたと言える。回答の中には、内発的動機と外発的動機の両方にあてはまるものがあり、動機づけの問題は、内発的動機対外発的動機といった単純な二項対立的な見方ではなく、これらは自己決定の度合いという視点から連続線上にあるとする Deci & Ryan⁴⁾の主張を証明する結果となった。

次に、二つの学部生の相違点について、まず、一般学部生の1人あたりの回答平均数が1.27件であったのに対し、外国語学部生のそれは1.97件と大きく上回った。これは、「異文化間コミュニケーション論」という授業に対する意欲の程度の差を示唆していると思われる。言語学習と文化学習は密接な関連性があることから、言語を専門とする外国語学部生がより強い思いでこの授業に臨もうとしていたことが垣間見られる。「理解と興味」の下位概念の中で、一般学部生からは「自文化理解・異文化理解」に関する回答が6割を占めたのに対し、外国語学部生の回答は12パーセントであった。他方、外国語学部生の場合、「トピックへの興味」は9割近くの回答を占め、他の下位概念と比して群を抜いて高かった。この結果の理由の1つとして、それまでの彼らの異文化体験との関連が考えられる。今回の調査では、詳細な報告は紙幅の関係で控えたが、質問紙の「設問3 あなたのこれまでの異文化体験について書いてください」に対する回答から、外国語学部生のほぼ全員が過去に海外研修や留学を含む異文化体験をもっていることが明らかになっ

た。無論、海外経験だけが異文化体験ではない。質問紙の設問の中にも例示したように、国内での異文化体験や異なる地域への引っ越しをともなう経験、等もここに含まれる。また、大学内で多文化や国際事情に関連した科目やコースが提供され、学生たちがアカデミックな視点から異文化を体験することが可能かどうかによっても左右される。今回の調査対象となった一般学部生の大学では必須の外国語と一部の選択科目を除けば、上記にあたる科目は希少であり、そのため、在学生在が教科を通してグローバルな視点を養う機会は限られていた。その結果、A 大学一般学部生は、「異文化を知りたい、異文化コミュニケーションとは何かを知りたい」といった興味と好奇心に基づく学習動機の段階にあったと考えられる。その根拠を示す一例として、一般学部生の場合、学習対象に対する興味が動機づけの重要な要因であるところの内発的動機が回答の 83 パーセントを占めていたことから窺い知ることができる。

一方、B 大学外国語学部生の場合、過去の海外研修・留学を含む異文化体験の豊富さもさることながら、学内では「国際交流科目」、「グローバルコラボレーション科目」、「コミュニケーションデザイン科目」、等、国際関連コースが多数提供されている。学生たちは、個々人の過去の異文化体験とともに、アカデミックな意味でも国際的分野に日々触れる環境の中で生活をしていた。また、先述のように、「トピックへの興味」に関する回答が最多となったが、本稿の「結果」で報告したように、その内容は具体的かつ詳細なものであった。この結果は彼らの専門性から鑑みてもごく自然なものであろう。また、外国語学部生の専門性と関連して、一般学部生の回答には現れなかった「専門分野と将来」に関する概念カテゴリーが出現したが、6 割以上の内容は授業での学びを将来の仕事に役立てたいといった「同一化的調整」を示したものであった。

また、「専門分野と将来」の下位概念の 1 つである「外国語学部の学生だから」に該当した回答には「外国語学部生として～」や「外国語学部に入ったからには～」、等の表現が顕著に見られた。そこには外国語学部生として言語の習得だけでなく、文化についても精通しているべきであるという義務感と同時にこの授業に対する意気込みを感じることができた。これらの内容は、「同一化的調整」に該当するものの、そこには、外国語を専門とする者としての自尊心に関わる意味合いが含まれているとの解釈も可能であり、極めて「取り入れ的調整」に近い位置づけとなっていた。この結果は、「概念的に隣接する動機づけのタイプは関係性が強く、概念的に分離するほど関係性が弱くなるはずである」²²⁾ との見方と一致している。もう一つの下位概念である「将来」の中でも、この授業での学習経験と内容を将来の職業に活かしたいとの意志がその回答に現れていた。他方、一般学部でも「将来」に関する回答が 4 件見られた。そして、そのうちの 3 件は就職活動を控えた 4 回生によるものであった。速水²²⁾ は、「人は成長する過程で外界の様々な刺激を取り込み行動を形成し、自分を形成していく」と述べ、動機づけには年齢による違いがあることを指摘している。社会への旅立ちを目前に控えた 4 回生によってこの「将来」に関する回答が得られたことは、彼らがグローバル社会の中で多文化の存在を認識することの必要性を感じ始めた

ことを物語っており興味深い。他方、外国語学部生の場合、2 回生の受講生から同様の回答を得たことは、単なる興味や関心を越えたところで、自分たちの将来と深く関連づけながら「異文化間コミュニケーション論」という科目の履修を考えていたことがわかる。

V. 結語

本稿では Deci & Ryan が自己決定理論の中で提唱した学習のプロセスモデルをもとに、一般学部生と外国語学部生との異文化間コミュニケーション学習動機について比較検討した。そこには共通点も見られた一方で、各大学各学部の文化的状況を反映した特徴のある結果が違いとして浮かび上がった。馬場園は²³⁾ 学習意欲とは、「学習活動を引き起こす人間の内部的動機の総称」と定義され、意欲という言葉は動機づけや「やる気」という言葉と同義に用いられていることを指摘している。今後、教育心理学が指摘するところの内容必然的、状況必然的、そして、自己必然的学習意欲を鑑みながら、各学部の文化的状況と学生の期待に沿った学習活動の立案と実践が必要であると考えられる。

引用文献、注

- 1) 石井敏：「異文化コミュニケーション研究の背景：第 1 章 研究の歴史的背景」石井敏・久米昭元・遠山淳編『異文化コミュニケーションの理論』（有斐閣ブックス, 2000, 第 1 部第 1 章）。
- 2) 国立情報学研究所（NII, National institute of informatics）が運営する学術論文や図書・雑誌などの学術情報データベース。
- 3) 岡直樹：「動機づけ」吉森護・市河淳章・田中宏二・浜名外喜男・高橋超編『社会心理学用語辞典』（北大路書房, 1995）。
- 4) E.L., Deci & R.M., Ryan: *Intrinsic Motivation and Self-determination Theory in Human Behavior* (Plenum, New York, 1985)。
- 5) 八島智子：『外国語コミュニケーションの情意と動機』（関西大学出版部, 2004）。
- 6) 櫻井茂男：「内発的動機づけ」宮本美沙子編『情緒と動機づけの発達』（金子書房, 1991, 第 III 章）
- 7) 鹿毛雅治：「内発的動機づけ研究の展望」『教育心理学研究』42, 1994, 345-359.
- 8) A.W., Kruglanski, I., Friedman & G, Zeevi: "The effects of extrinsic incentive on some qualitative aspects of task performance", *Journal of Personality*, 39 (1971) 606-617.
- 9) 速水敏彦：「外発と内発の間に位置する達成動機づけ」『心理学評論』38 (2), 1995, 171-193.
- 10) R.J., Vellerand: "Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation", *Advances in Experimental Social Psychology*, 29 (1997) 271-360.
- 11) 岡田涼：「小学生から大学生における学習動機づけの構造的変化」『教育心理学研究』58, 2010, 414-425.
- 12) 安藤史高・布施光代・小平英志：「授業に対する動機づけが児童の積極的授業参加行動に及ぼす影響—自己決定理論に基づいて」『教育心理学研究』56 (2), 2008, 160-170.
- 13) 西村多久磨・河村茂雄・櫻井茂男：「自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス—内発的な学習動機づけは学習成績を予測することができるのか?—」『教育心理学研究』59 (1),

- 2011, 77-87.
- 14) 鈴木高志・櫻井茂男：「内発的および外発的な利用価値が学習動機づけに与える影響の検討」『教育心理学研究』59, 2011, 51-63.
 - 15) 原田登美：「留学経験は学習動機にいかに関わっているか - 「自己決定理論」に拠る「甲南大学 Year in Japan プログラム留学生」の留学と日本語学習の動機の変化」『言語と文化』12, 2008, 151-171.
 - 16) R. C., Gardner & W. E., Lambert: *Attitude and motivation in second language learning*. (Newbury House, Rowley, 1972) .
 - 17) 藤居真路：「中学 1 年生の異文化指向性と外国語（英語）学習動機づけの関係」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部, 60, 2011, 153-172.
 - 18) R., Clement & B. G., Kruidenier: "Orientations in second language acquisition: The effects of ethnicity, milieu and target language on their emergence", *Language Learning*, 33 (1983) 272-29
 - 19) 縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩：「大学生の日本語学習動機に関する国際調査—ニュージーランドの場合」『日本語教育』86, 1995, 162-172.
 - 20) A 大学では、2015 年度にカリキュラムが改変され、授業の名称が「異文化コミュニケーション」から「異文化間コミュニケーション論」に変更された。今回の調査対象となったのは、旧カリキュラムの学生である。
 - 21) 下位概念のパーセンテージはすべて上位カテゴリーに対する割合を示している。
 - 22) 速水敏彦：「外発と内発の間に位置する達成動機づけ」『心理学評論』38 (2), 1995, 171-193.
 - 23) 馬場園陽一：「学習意欲」三宅 和夫・小嶋 秀夫・北尾 倫彦編『教育心理学小辞典』（有斐閣, 1991）